

全体会

実施日時：2004年8月4日（水）13：00～13：20

開催場所：神大会館

開会挨拶	滝川 好夫	神戸大学	2004PCカンファレンス実行委員長
挨拶	野上 智行	神戸大学学長	2004PCカンファレンス名誉実行委員長
司会	鳥居 隆司	椋山女学園大学	CIECカンファレンス委員

講演会

実施日時：2004年8月4日（水）13：20～15：00

開催場所：神大会館

演 題 「ユビキタスとエイリアネーション

～どこにでもあるが故の疎外をいかにして克服するのか～」

辛坊 治郎 読売テレビ解説委員

【講演要旨】

2002年4月に鳴り物入りでスタートした、テレビとCSデジタル衛星とインターネットを融合させた「EPサービス」が、今年3月、ひっそりと歴史から消え去った。誰でもが、デジタルを意識せずに、「斬新で利便性の高い」サービスを楽しむことができるという、「ユビキタス」の思想を先取りしたようなシステムはなぜ失敗したのか。その原因を探ると、デジタル社会に過度の期待をする人々が共通して陥る落とし穴が見えてくる。また、既存メディアの雄、テレビから発信される情報を決定付ける視聴率調査システムに潜む罠から、ユビキタス社会において予想される情報の属人的格差を考察し、「どこにでも存在する」ということと、「誰もが恩恵を受ける」ということの違いについて考えたい。

【プロフィール】

1956年 大阪府岸和田市生れ

1980年 早稲田大学法学部卒 同年読売テレビ入社

1996年 USIA（米国国務省文化交流庁）の招きで渡米、メディア研究

1997年～98年 ニューヨークペース大学客員研究員

ズームイン!!SUPER（月～金、5:30～8:30全国ネットNTV系）内でニュース解説

著書：TVメディアの興亡（集英社新書）

ふらっとアフガニスタン7泊8日（NTV出版部）

（敬称略）

シンポジウム

実施日時：2004年8月4日（水）15：15～18：00

開催場所：神大会館

「メディアと教育」～学びのコンテンツを考える～

このシンポジウムは、情報社会におけるメディアと教育の望ましい在り方を、メディアを媒介した学びの実践を軸に議論したいと考え企画いたしました。ここで取り扱うメディアは、新聞や書籍などの活字メディアや、テレビや映画などの映像メディアだけでなく、コンピュータやインターネット、さらにはテレビゲームや携帯電話などのデジタルメディアを含んでいます。

メディアが伝達する多様な情報を教材あるいは資料として活用していく場合に、コンテンツの作成と共有がきわめて重要となります。そこでこのシンポジウムでは「学びのコンテンツを考える」ことを副題としました。

わが国の学校教育は情報社会の進展に対応して情報教育にはこの数年熱心に取り組んできましたが、メディアと教育については従来型のテレビやビデオといった視聴覚の利用教育やNIE（Newspaper in Education、教育に新聞を）などの「メディアを使う教育」ととどまっていた。しかし、最近こうした「メディアを使う教育」から、メディアが伝える情報をクリティカルに読み解き、情報を主体的に創造し発信していくメディアリテラシー教育が学校や大学の中でも実施され始めました。そこでは、メディアが伝える情報そのものが学習コンテンツになることはもちろんですが、それらの情報を生徒や学生たちが加工して、あたらしい学習コンテンツを作成し、共有する取り組みもさかんに行われています。

このシンポジウムでは、学びのコンテンツの創造的な制作・開発が、学校や社会のなかでより身近に実現できる環境の整備と指導者の育成が急務であることを踏まえつつ、これまでの情報教育やメディアリテラシー教育を超えて、学校から大学、社会に至るまでのメディアと教育に関わる様々な課題を議論したいと思っています。

パネリスト	石井 和則	兵庫県立兵庫高等学校
	石田 晴久	多摩美術大学
	猪俣 富美子	東外大アジアアフリカ言語文化研究所研究支援推進員
	福島 健介	八王子市立別所小学校

司 会	筒井 洋一	京都精華大学 CIEC カンファレンス委員
-----	-------	-----------------------

（敬称略）

小中高部会企画

実施日時：2004年8月5日（木）15：00～18：00

開催場所：国際文化学部キャンパス B棟1階 B-110大講義室

「これでいいのか情報教育」

- 高等学校「情報」、中学校「技術・家庭」を検証する -

新指導要領が小中学校で実施されて2年、高等学校では1年が経ちました。特に高等学校の「情報」は、戦後初めての新教科ということもあり、教員の間には実施にあたっての不安や心配などから、各地ではさまざまな研究会や講習会が開かれ、熱気に溢れていました。そして実施して1年が経過し、かつての熱い時が去り「情報」もようやく軌道にのったかのように見えます。

しかし、実状はどうなのでしょう。実施前に懸念されたカリキュラム、評価、教員体制、教材、教科書、コンピュータ環境などさまざまな問題点は本当にクリアしているのでしょうか。そして、中学校と高等学校の連携、さらには高等学校・大学の連携はうまく取れているのでしょうか。高等学校によっては、教員は専任ではなく非常勤講師対応で、また授業内容は依然としてワープロソフトや表計算ソフトなどの使用方法を学ぶ、つまりコンピュータリテラシーに終始しているところもあると聞きます。そして、各地でどのような取り組みを行っているか実状はなかなか情報交換できていません。

この小中高部会企画では情報教育の目的を再確認し、これからの高度情報通信社会に生きる子どもたちに情報教育として「どのような力」を育むのか本音で語り合うために、講演、事例発表、意見交換などを企画しています。関心のある皆さまの積極的な参加と「熱い」議論を期待しています。

基調講演

林 英輔 麗澤大学

事例発表

山品 利男 六甲アイランド高等学校

松枝 英男 神戸市立丸山中学校

討 論

「これでいいのか情報教育」

(敬称略)

大学生協企画

実施日時：2004年8月5日（木）15：00～18：00

開催場所：国際文化学部 B棟2階 B-209中講義室

「大学によるパソコン必携化への動きと、そのサポートのあり方」

「人が生きる道具としてのコンピュータ」をテーマに開催される2004PCカンファレンス。コンピュータを利用した教育とは何か、どうあるべきかを考えながら、大学生協として出来るサポートとはなにかを考える時ではないでしょうか。近年、教育学系を中心にPC必携のとりくみが、複数の大学ですすめられています。そこには年間通しての、そして4年間を見据えてのサポートと、状況に応じてその事業化が求められてきます。

一方で、大学の教育内容により深く入り込んだサポートを模索している生協もあります。教育内容とリンクしたサポートを、ハードメーカーやソフトハウスと一緒に取り組んでいくことができれば、大学生協そしてCIECらしい取り組みだと言えるのではないのでしょうか。

というわけで、学生へのPCサポートの全国実践事例をひろいあげ、学生・教員・生協職員、そしてメーカー、それぞれの立場で、成功・失敗事例の分析を行い、サポートのあり方にまで迫っていければと考えています。

今回は、簡単な事例報告をもとに、ディスカッションを中心に進めていく予定です。先立って行っている私学の進んだ例、そして、国立教育系、もっともっと手を上げてもらって・・・ぜひ一緒に議論しましょう。

開催地企画

実施日時：8月5日（木）15：00～18：00

開催場所：国際文化学部キャンパス B棟2階 B-210大講義室

生きる道具としてのIT技術

～被災地から生まれた防災に役立つコンピューティング～

自立した生活者になるためには「必要な情報を収集し、合理的に判断・選択し行動すること」が必要になりますが、「情報収集」「判断」「選択」に役立つどのような道具があるのだろうか？最新のハイテク情報技術が私たちの「生活」にどのように貢献できるのだろうか？その実践例は？今回は、阪神淡路大震災から10年を迎えつつある開催地神戸として、大震災の教訓を踏まえた防災関連のコンピュータシステムの実践例を講演とデモによって紹介し、「人が生きる道具としてのコンピュータ」の活用事例を知り体験し、そしてその目指すところについて考えることを新しい「学び」の契機にして頂きたいと思います。

一つ目の報告とデモでは、兵庫県が阪神淡路大震災の教訓を踏まえ、地震災害だけでなくあらゆる災害に対応できる災害対応情報ネットワークシステムとして構築した「フェニックス防災情報システム」を紹介いたします。災害対策本部の意思決定を支援するトータルシステムですが、防災関係機関にWeb技術を利用

して最新情報を提供するとともに、一般県民にはホームページにより防災関係情報を提供する地域社会全体で支える開かれたシステムを指向しています。

二つ目の報告とデモでは、神戸市において震災を契機にして進められた地盤調査や地盤と震災被害の関係についての研究成果をデータベース化したGIS(地理情報システム) - 「神戸JIBANKUN」を紹介いたします。被害と地盤の関係が地理情報システムの活用によってビジュアルな情報として表現されることによって、その情報の共有・活用が安全な都市づくりにいかに役立つとうとしているか？神戸ならではの事例紹介です。

以上の二つの報告と連動して参加者の皆さんに両システムを疑似体験した頂く機会も用意したいと思えます。なお、この企画に参加頂き、別途オフション企画で紹介している「人と防災未来センター」(HAT神戸)や「NIRO神戸ロボット研究所」[臨床研究情報センター]などの施設見学と連動させることによって、開催地神戸ならではの「体験と学び」の機会として頂きたいと思えます。

講演及びデモ 1

阪神淡路大震災の教訓を踏まえた実践的な防災システム
～「新フェニックス防災システム」～
曽根 孝 兵庫県企画管理部防災局防災通信室室長

講演及びデモ 2

震災被害のデータベース化から安全な都市づくりに
～地理情報システム「神戸JIBANKUN」～
沖村 孝 神戸大学・都市安全研究センター副センター長

ワークショップ

実施日時：2004年8月5日(木)15:00～17:00

開催場所：国際文化学部キャンパス F棟2階 F-201 演習室

国際コミュニケーションセンターにおける

外国語支援体制の紹介およびワークショップ

神戸大学では、平成15年10月、外国語に関する研究及び、外国語科目に関わる教育の企画・運営・実施等を行う組織として、国際コミュニケーションセンターを発足させました。センターでは教室での授業と平行して、教室外での学習環境の整備を重視しています。

本企画では、ランゲージハブ室を中心とした、センター活動の紹介と、CALL室でコンピュータを実際に操作してもらおう形でワークショップを行います。ワークショップでは1)スキルチェック、学力診断システムの導入と開発、2)コーパス言語学にもとづく、有効な語彙指導、3)ホームページを活用した英語授業実践などを行う予定です。

(敬称略)

ワークショップ

「国際コミュニケーションセンターにおける外国語支援体制の紹介およびワークショップ」

8月5日(木) 15:00~17:00

加藤雅之・柏木治美・石川慎一郎

神戸大学では、平成 15 年 10 月、外国語に関する研究及び、外国語科目に関わる教育の企画・運営・実施等を行う組織として、国際コミュニケーションセンターを発足させました。センターでは教室での授業と平行して、教室外での学習環境の整備を重視しています。本企画では、ランゲージハブ室を中心とした、センター活動の紹介と、CALL 室でコンピュータを実際に操作してもらおう形でワークショップを行います。ワークショップではセンターの取組みの紹介のあと、1) スキルチェック、学力診断システムの導入と開発、2) コーパス言語学にもとづく、有効な語彙指導、3) ホームページを活用した英語授業実践などを行う予定です。

国際コミュニケーションセンターについて (パンフレットより)

21 世紀のグローバル化時代にあって、外国語の役割は大きく変動しようとしています。日常的にあらゆる国の情報が瞬時にキーボードで呼び出すことができ、さまざまなマルチメディアを駆使して、外国語に触れる機会が飛躍的に増大しています。学術研究の上でも国際協力がますます求められる時代にあって、外国語の運用能力を身につけることはきわめて重要になっています。そこで求められるのは、スキルを重視する運用能力だけでなく、異文化に対する深い洞察をともなった真のコミュニケーションでなければなりません。こうしたニーズに対応するため、神戸大学において、外国語に関する研究ならびに、外国語科目に関わる教育についての企画、運営、実施等を行うとともに、国際学术交流・留学のための外国語教育支援を行うことを目的として、2003 年 10 月、国際コミュニケーションセンターが設立されました。



図1 語学学習環境の整備 (授業・HUB・CALLの連携) イメージ

(1) スピーキング (リスニング) トレーニング診断システムの開発 (柏木)

一般的に CALL 環境等を活用した学習は、学生個人の目的や興味に応じて学習できるという利点があり、新たな可能性を持っている。反面、個人の自発的学習が求められるため、学習の継続が困難である、学習内容に対してきめ細かい指導やサポートが受けにくい、といった課題点がある。また CALL 教材での学習が始まると、学生は、対コンピュータとの関係が多くなり、教員側の指導が難しい場面も多々存在する。これらを解決するためには、CALL 等の学習環境と授業に連携を持たせ、教員側がこれらをコーディネートし支援

していくことが重要であると考える。

一方、CALL 教材のコンテンツを見ると、スピーキングまでを含めたスピーキング（リスニング）学習システムは今後ますますその発展が望まれるものと考えられる。

これらをふまえ、図1のような CALL、HUB、授業そして教員による指導支援、という統合的語学学習システムを目指したスピーキング（リスニング）診断トレーニングシステムの開発を考える。本発表では、システムが考案最初の段階であるため、その概要や方向性について述べる。ここでは、発音・イントネーション・音の高低強弱等の音声レベル、パラグラフ・構文・語句表現、談話レベルといったスピーキングに必要なスキル項目を洗い出し、

- ・単文リピーティング、文の言い換え、パラフレーズ練習
- ・一定量の情報伝達、情景描写を目的としたタスクを取り入れた活動
- ・分類、比較対照、原因・結果といったパラグラフ意識したスピーキング活動

といった活動を行う中で、どの項目が弱いかといったスキルチェックを教員側が行える機能を作り、それをもとに学習者が発話（聴解）訓練を行えるシステムを開発する。このシステムにより、HUB 室ではネイティブが学習者の状況を意識した指導を行い、またオーラルを中心とする授業等との連携をも考えていくことができ、CALL・HUB・授業が連動したシステムを構築することが可能となる。

(2) CALL を用いた ESP 語彙力診断テスト（石川）

英語の 4 技能の習得において、その成否を決める要因の一つは語彙力である。英語学習における語彙力の重要性は広く認識されているものの、大学英語教育では、従来、語彙指導にあまりウエイトが置かれてこなかった。

本発表では、コーパス（大規模な電子化された言語データ）から収集した英語の原資料を用いて機械的に語彙リストを切り出し、一定の修正・補正を行った後、そのデータを使って語彙力診断テストを作成する方法について報告する。収集する資料にバイアスをかけて語彙リストを作成し、一般的な英語データから得られたリストとの差分を取れば、例えば法学部生用、医学部生用、工学部生用などと学習者の専門に特化した ESP 語彙テストを作ることも可能になる。

語彙力診断テストの開発に当たっては、形態・分量・評価システムという 3 つの面が問題になる。語彙テストの形態としては、Nation, Meara and Buxton, Meara, 望月などの先行実践があるが、日本人学習者の EFL 学習環境を考えれば、望月(1998「日本人学習者のための英語語彙サイズテスト」『語学教育研究所紀要』12, 27-53.)で提唱された和英選択型のテスト形式がもっともなじみやすいものと考えられる。

一般に、語彙力は英語力全体（4 技能）との相関性が非常に高いと言われており、語彙力診断テストを利用すれば、プレイメントやアチーブメント（達成度）評価を簡単に行うことが可能になるとと思われる。

(3) インターネットを活用した英語授業実践（加藤）

本セクションでは、まず私の授業で実践している、Reading Report、Listening Report を紹介する。これは毎週の課題を HP 上からフォームを使って送付してもらい、自分の進行具合を振り返るとともに、他の学生の進捗をチェックし、フィードバックを得るようにしたものである。また、メルボルン大学の日本語学科の学生との交流（HP およびチャット、掲示板）の成果について報告する。学生にとって、どのタスクが英語学習において一番効果的であったかという観点から、こうした多様なタスク相互の連携、および有機的連関、あるいは最適化された組み合わせについて、考察および提言を行う予定である。